

音楽は、時間と空間を支配する不思議な芸術です。声や楽器の振動数が複雑無限に組み合わせり、それによって人々は歓喜し、酔いしれ、また時には落涙することもあります。

舞台上から発せられた振動は、空気中を経て人の鼓膜を震わすと同時に、ホールの反響板や舞台の床、客席の壁や天井なども共震させます。良い楽器がそうであるように、すぐれた演奏による振動の波形が美しければ美しいほど、ホールもまた好ましい共鳴を繰り返します。音楽の楽しさや悲しさを織り込み、長い年月を経て、ホールの響きは醸造されていきます。ひよっとすると、聴いている人々の感動のため息すら振動となってホールの壁に記憶されているかもしれません。1992年に開館したはくばく文化ホールは、当初から均整さを備えたすばらしい音響であったばかりでなく、あまたの名演奏と聴衆によってさらに熟成を重ね、ひとつの生命体であるかのように呼吸を続けています。

私たち「古典四重奏団」という弦楽四重奏団は、30年間ほど、関東近郊の複数のホールで録音を続けてまいりました。2023年からは、縁あって、はくばく文化ホールで定期的に録音を重ねています。

残念ながら、私はホールの歴史にほとんど立ち会えておりませんし、音響学の専門家というわけでもありません。それでも、はくばく文化ホールの舞台上で実際に演奏をしてみると、本当にホール全体が生き、息吹いていることがわかります。音楽の感動体験を積み重ねてきた空間であることをはっきりと体感することができるのです。

このホールでの演奏は最高の楽しみです。響きを極めたこのホールは、音楽のすみずみまでも温かく迎え入れてくれる、演奏家にとってこの上ないパートナーだからです。

「古典四重奏団」チェロ奏者 田崎 瑞博